

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻2月号(通巻535号)

風土

2



冬すみれ

神蔵

器

山一つあたためてゐる冬すみれ

寒鯉となる吐く息を合せゐて

耳遠き仏のあそぶ竜の玉

晩年か万年青の玉の朱をきはむ

水底に日のあり冬至十日前

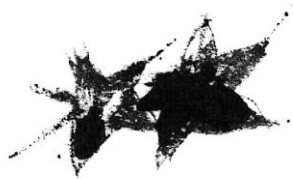
目裏の乾けり十二月八日
大寺や寒の十日を風入る
人肌の枯木に凭れば人語かな
聖菓切る妻の忌日はクリスマス
着ぶくれて水のごとくに年の逝く

妙好山 雲際寺

義経の位牌を拝す炭火かな

十四代沈寿官

山眠る十四代をてのひらに



竹間集

同人作品



桃青忌

宮川みね子

初しぐれ犬に当てたる聴診器
京の旅とりやめ冬の立ちにけり
うしろより声の近づく返り花
芙蓉の実空にほほゑみあるごとし
岩をうつ水のしぶきも桃青忌
寺町をさきに回りにて二の酉へ
桂郎青柳寺の空の凸凹榎櫃の実

鷹鳴けり

浜 明史

俳諧に連想の妙枯れ蓮
小春日の大浦半島紅葉病む
柴漬ふしづけの竇建てのこゑや夫婦舟
ぼつねんと冬田の畔の田舟かな
狛犬の阿吽や銀杏散り終へし
けふはこれこれしかかとメモ懐炉貼る
鷹鳴けりわが晴天の誕生日

ひよんの笛

浜 福恵

夕照の潮汲浜や神の旅
田仕舞ひの烟ただよふ餓ゑ坂
塩倉へ渡ししの址や草枯るる
湾に二つの島くろぐると神の留守
波郷忌のしづかに昼の潮満ち来
墨を水に流して十一月逝けり
余生てふこの日溜りやひよんの笛

黒 谷

— 岩木 茂 —

山 蔭 とな る 百 日 を 紙 漉 け り
水 底 の 落 葉 を 浚 ふ 寒 の 入 り
切 口 の し ぐ れ て ゐ た る 楮 畑
時 雨 る る や 川 面 を 叩 く 楮 み だ し
紙 干 す と み どり 濃 く な る 冬 菜 畑
暮 早 し 紙 の 干 場 に 日 の 残 り
厳 寒 の 水 に 沈 み ぬ 楮 重 石
寒 靄 に 楮 蒸 す 湯 気 の 溢 れ を り
深 雪 晴 紙 干 板 は 出 尽 く し ぬ
寒 拆 や 楮 を 「 か ご 」 と 呼 べ る 村

落葉卷き上げ郵便夫来たりけり
冬眠の山に丸木の橋架かる
凍蝶を抱き止めて草雫せり
雪の中に輝いてゐる竜の玉
風花や風花いろの昼の月
木守や漉屋の窓の糊曇り
漉小屋の玻璃戸の棧に積もる雪
寒漉のいのちなりけり手桶の湯
漉きあがる紙の嵩なす雪明り
紙漉きの話に囲炉裏火の熾る

山河集

同人作品



神蔵 器選

身の内に不開の間あり雁渡る
菅原 末野

吊し柿はじめ重たく吊られけり
分譲の残る一画草紅葉
底抜けの防火バケツや木の実降る
返り咲く法師小さき山法師

磯野 たか

一木のマタギの神に花八つ手
切り金の衣の仏小春かな
葱活けて被せる藁の日の匂ひ
阿蘇下るロープウエイや日の短
銀杏黄葉日本大通り港まで

柿沼 盟子

沢蟹の燈に遊べば霧深む
鬢張らぬ一葉の鬚竜の玉
煎餅屋の裸電球初時雨

駒込居士

比翼塚に並びて添はぬ冬ざくら
スパイスの大瓶小びん返り花

土井 三乙

朝市へ行くセーターに首突つ込む
思ひぬしよりも大きな注連選ぶ
大島紬は父譲りなり屠蘇を酌む
おおしま
むきあうて茶を飲んでゐる七日かな
初日記雪国なれば雪のこと

小林 共代

波郷忌や歩いて渡る葛西橋
三門に日ざしのとどく石路の花
冬麗や弘法大師の硯石
末枯や風の後に風の蹴く
柚子挽いで空の隙間をつくりけり

風土独語／神蔵 器



冬日向ころがり太る綿ぼこり

柿沼 盟子

綿ぼこりには、細かい綿くずが埃のように散つたものと、埃がたまつて綿状になつたものを言う場合がある。この句の場合は後者ではなからうか。

地方公演が終つて、久し振りに自宅にくつろいでいる。のんびり休んでいてもよいのであるが、そうもしてられない作者は早速部屋掃除にかかり箒を手にした。眼につくところには埃はないが、机の下や洋服箒の裏など意外とほこりがあるもので、掃き出された埃は、冬日向の明るい畳の上をころころところがり、驚きあわてて結びついたり、くつきき合つたりして太つてゆく。「ころがり太る」は絶妙、まさに童話の世界である。埃は小人その他大勢だがヒロインの姫を囲んで喜々と踊りたわむれているようだ。

潮入りの池に鱒きて石路の花

佐野つたえ

浜離宮である。戦後東京都に下賜され、浜離宮恩賜庭園として一般に公開されている。海水を利用した汐入り形式の大泉水中心の回遊式庭園がある。

わが来たる浜の離宮のひろき池に

帰潮のうごく夕のゆうぐれ

佐藤佐太郎

作者が離宮の池で見た魚は鱒であつた。鱒は日本近海だけでも五十種類にのぼるが、多くは熱帯から温帯の海域に分布している。俳句では夏の季語になつている。この時季（石路の花の咲く頃）離宮の池に鱒が見られたことは幸せであり、象の耳ほどもある菱形扁平の大きな体をゆつくりと煽るように動かして泳ぐ姿はまことに感動的である。これも吟行の成果であるが、自分が得た感動を俳句という形式の文字に表現し、再現して見せるのは作者の実力である。

猪鍋の一点煮立つ御師の宿

近藤幸三郎

鍋物で「一ヶ所の煮立つ」はあるかも知れないが、御師の宿の猪鍋であるところ何か不気味な異状感がある。

御師は祈祷のことに従う。身分は低いが神職である。宿坊の経営や参詣人の案内を兼ね、信仰の普及にも寄与している。この句の御師の宿は阿夫利神社のものとと思われるが、御師の宿と猪鍋は気持の上では釈然としない。

牡丹焚火うしろの闇に甲二立つ

石井 悦子

牡丹焚火は毎年十一月第三十曜の夜に、福島県の須賀川牡丹園で行われる。原石鼎がはじめて季語として用い、昭和五十年代に歳時記に記載された比較的新しい季語である。

甲二は国分甲二で須賀川支部の支部長として長く活躍された。

私は牡丹焚火は勿論、毎年一度の支部の吟行会には必ず呼んでもらった。思い出は多いが、中でも「風土」創刊二十周年の応募句に「法師蟬石椅子に置く腰の骨」があった。私はこの大会で「風土」の主宰になったのであるが、まだ若かったから甲二さんの句の「腰の骨」の実感がピンと来なかった。その頃の最長老の野中陸三さんだけが採っていたが、今だったら私も採っていたらと思う。

石井さんは須賀川支部の一人、甲二さんは直接の師である。「うしろの闇に甲二立つ」は幻想ではなく実感である。

カフェテラス「TARO」紅葉してメタセコイヤ 仙田 孝子

カフェテラスは岡本太郎美術館の中のもので、ローマ字で「TARO」であつたように思う。枳形城址を川崎民家園側に降り、生田緑地公園の中を暫く行くと、ほとけどじょうの生息する池があり、その一帯がメタセコイヤの林立する林である。そこからさらに石段を登って岡本太郎美術館、母の塔に至る。

退院して間もない仙田さんには距離というより枳形城址の登り下りはかなりハードであり、しかも岡本太郎の「芸術は爆発だ」という圧倒的なエネルギーの爆発はかなり体力を消耗し疲れさせたのではないか。そんな仙田さんにカフェテラスは恰好な休憩所であつたらう。窓から見えるメタセコイヤの林は紅葉し、盛んに落葉している。春の緑もよいが、秋の紅葉の方が病後の身にはやさしく心がやすまるものである。なお、この句は「風土」では珍しい破調であるが、リズムに狂いはない。

ナース技あり採血室に萩一枝 山本 令夏

「ナース技あり」は愉快だ。採血室に入るとき作者は緊張して体を固く、ナースに言われるまま腕をさしのべると、横を向きじつと眼を閉じていたのではないか、「はい、終わりました。採まないで、三分ぐらい強くおさえて下さいね」、ナースの明るい声である。痛くも痒くもない。緊張していたのがおかしい。室の隅に萩、たぶん白い花であらう、微笑のごとく咲いていた。

一木のマタギの神に花八つ手 磯野 たか

碧祥寺博物館の一つ、マタギ資料館での作である、マタギの神は山の神であるが、山の神にはマタギの神と杣（まき）の神がある。マタギの山の神は槍を持ち醜女と言われ、自分より醜い虎魚を見ると喜ぶというので虎魚が供えられる。一方、杣の山の神は男で斧を持つており、美男だという。

碧祥寺のマタギの神は、句の通り一木造りで、彫も荒く粗末なものであるが、そこにかえって素朴のよさがあり、マタギの神らしく作者を感動させた。老齡のたかさんのやる気には、いつも私の方が励まされる。

啄木のヒバの木の天冬に入る 水井千鶴子

ふるさとの寺の畔（ほとり）のひばの木

いただきに來て啼（な）きし閑古鳥（『悲しき玩具』）
の歌碑のある宝徳寺のひばの木の天である。

風土集



神蔵器選

短日の改札入りて待ち合はす

東京

柿沼 盟子

刃を入るる口見当たらず牡蠣割りぬ
冬日向ころがり太る綿ぼこり
極楽といふ名のギヤラリー冬椿
海沿ひに鎌倉をゆく小六月

近畿三司

横浜

佐野つたえ

地に這ひて色かへぬ松三百年
日本画の紅葉となりて浜離宮
潮入りの池に鱒えいきて石路の花
初時雨定まれる道歩き行く
冬日向いくつもの鉢動かしむ

横浜

近藤幸三郎

猪鍋の一点煮立つ御師の宿
澄む秋の丹塗柱は笛師の座
他人の児を抱かせてもらふ七五三
小田原に隣る宿場の野菊かな

夕風や紅葉かつ散る海女の墓
字余りのやうな雨降る冬初め
冬浅し木屑のにほふ木地師小屋
鯨幕ふれつつ弾く竜の玉
竜の玉踏まねば寄れぬ百葉箱
母川で打たれし鮭を見てしまふ

須賀川牡蠣焚

福岡

石井 悦子

綿虫や園の入り口昏れて来し
四百の眼澄みゆく牡丹焚
むらさきのたましひとなる牡丹焚
牡丹焚火うしろの闇に甲二立つ
燂となる牡丹焚火にあたまる
「童謡の小径」へ抜けて木の実降る
くぬぎ落葉羽根ペンに似て机辺に置く
観察会ルーペに覗く花八手

川崎

仙田 孝子

東京 森 美香